

学びを通じて社会との関わりを考える

「立教セカンドステージ大学」

立教大学池袋キャンパス。若い学生たちに混じって、50代、60代、70代の“学生”の姿があった。彼らは、「立教セカンドステージ大学(RSSC)」の受講生。「RSSC」は、50歳以上のシニアを対象に「学び直し」「再チャレンジ」「異世代共学」をキーワードに2008年4月に開校した。

●
本科と専攻科の就業期限はそれぞれ1年で、前期・後期に分かれ午後3時頃から夕方まで毎日講義とゼミが組まれている。本科・専攻科のカリキュラムは共通で、科目群とそこに属する講義から自由に選択することができる。2013年度は以下の3科目群の講義が行われている。

- エイジング社会の教養科目群
 - 自分のからだと言葉を取り戻す
 - 生涯現役という生き方
 - メディアとジャーナリズムのあいだ
 - 地球環境の変遷と未来 など16講義
- コミュニティデザインとビジネス科目群
 - ソーシャルビジネス
 - アジア・アフリカの貧困とNGO
 - 働き甲斐と労働の人間化
 - 暮らしに役立つ経済と金融 など14講義
- セカンドステージ設計科目群
 - セカンドステージと市民生活
 - 成熟社会論
 - 地域ケアと看取り
 - 現代史の中の自分史 など15講義

またこのほかに立教大学全学共通のカリキュラムからも、希望すれば4科目程度の受講が可能であり、学問を通じての異世代交流の貴重な場となっている。

6年目に当たる2013年度は本科生100人、専攻科(本科修了後に入学可能)53人の計153名が学ぶ。本科生の平均年

齢は62歳、男女比はほぼ同じだが男性が若干多い。勤務経験者が72%と最も多く、以下自営業者13%、主婦13%、在職中9%と続く。

講師陣の充実や多彩なフィールドスタディなど、「RSSC」の魅力は数多いが、他のオープンカレッジと一線を画するのは、本科・専攻科ともにゼミが必修であることだ。すべての受講生がいずれかのゼミに所属し、担当



■お話をうかがった木下康仁教授

教員の指導のもと、修了論文を作成する。

■ 調整期間に有効なゼミ形式

リタイア後どのように生きていくのか。

高齢者が四分の一を占める社会においては、これは個人だけでなく、社会全体の大きな課題となってくる。しかし、高齢者と社会との関わり方については、今は大きな戸惑いの中にあると言ってもよいだろう。

急激な人口高齢化に伴う現実の劇的な変化に対して、まだその認識と理解に欠けているか、あるいは過剰に反応して右往左往しているか……。定年後すぐに居場所を見つげられる人は、決して多くはない。

「定年後は、次のステップの前に人生を振り返り、自分と対話する調整期間を設けるといい。少人数のグループでじっくり学ぶ大学のゼミという環境は、その時間を過ごすのに適している」と「RSSC」でゼミを担当する木下康仁教授は語る。「RSSC」に入学してくる人は、リタイア後人生後半の居場所を求めて模索したものの、今ひとつ納得がいかず、どこか不安全感を抱えている人が多いそうだ。

ゼミでは、今後の目的を検討できる環境を提供する。もともとライフスタイルや社会的活動を創出する能力は持っている人たちだ。答えは自分たちで見つけられる。ゼミでの学び



■ゼミ風景。発表者の話真剣に耳を傾ける

や気づきを通して、人生後半の目的がはっきりし、スムーズに社会と関わることのできる土壌が整う。知識や情報の提供を目的とするカルチャーセンターや、他の社会人大学との大きな違いはここにあるようだ。

ゼミでのグループ学習を通して、新たな人間関係が形成されるのも大きな収穫。「こういう場がなければ、ここまで深い話をする間柄になるのは無理だった」と話す受講生も多いという。「リタイアした後にそういう友だちができるのは、非常に稀だしすごいこと」と木下教授。

学生たちの声にもあるように、在学中のクラブ活動的な集まりや、卒業後の同窓会活動などを通じて、コミュニケーションの蓄積がなされて、生き方や人生観などの深い話も自然に交わされるようになるという。仕事関係でもなく、ご近所や幼馴染とも違う、新しい信頼関係を結べることは、後半の人生に大きな彩りを加えてくれるだろう。

また、なかなか難しいとされる世代間コミュニケーションも、前述の全学共通のカリキュラムを通じて、自然に行われている。

「学生の反応がフレッシュ。RSSCで学ぶ人たちは、親や親戚の人と同年齢だが、彼らには話せないことを話せたり、逆に面白い話が聞けたり。授業とはいえ社会的な場になっている。年を重ねた人は話す内容を豊富に持っていますからね」と木下教授。「RSSC」の受講生はむしろ元気のない若い世代

を心配しており、木下教授は元気な高齢者世代との交流で、若者たちが少しでも前向きになることを期待している。

■ 高齢者の能力を生かす受け皿が必要

「RSSC」修了生の進路は、再就職、ボランティア参加、他大学への再入学などさまざま。「RSSC」における「調整」は功を奏しているようだ。

木下教授によれば、専業主婦であれ、会社員であれ、人生経験を積んできた高齢の人達には、人間としての成熟と力量があるという。

生涯現役時代を生き抜く力を持った高齢者が、団塊世代を中心にこれからは世の中にあふれてくる。しかし、社会の側も高齢者自身もいまだに「余生」をおくる高齢者しかイメージできないとしたら、それはとても残念なこと。

学部の学生は、人生のファーストステージに出ていくために学ぶが、ここではセカンドステージへの再登場に向けて、学びを通じてもう一度自分の可能性や適性を再点検することができる。

社会実験としてスタートし、実績を上げつつある「立教モデル」。「RSSC」が先鞭となり、自身の点検や棚卸し、リセットのためのさまざまな仕掛けが、今後さまざまな場で増えていくことに期待したい。



● 受講者の声 ●

● 入ったきっかけ

- 定年で仕事退職後5年特に何もせず、「このままでよいのか」と考えていたところ同世代の友人にすすめられて。
- 定年したら、勉強し直したい、再度キャンパスライフを楽しみたいという理由で。
- 子どもも巣立ち、母も亡くなり、母でも娘でも会社員でもないニュートラルな存在になってみたかったため。夫がRSSCの先輩で楽しそうだったこともプラスに。
- 定年後、いままでとあまり代わり映えのないことは、したくなかった。「RSSC」入学の理由は、経済が長期低迷しているのに円高な理由をつきとめたいことと、これからの生きがいを探したいことの2つ。
- 学び直したいと妻が他大学に合格したのに触発される。受験勉強以来勉強をしてこなかったのが、卒論の続きの研究をしてみたくて。
- 立教大学卒業生。いくつになっても社会に関わっていたい、社会に貢献したいという気持ちから。また取得した資格に、より専門的知識をつけるため。
- 55歳で大病をし、57歳で教員を早期退職。退職後好きなことをしようと思っていた。立教に合格した娘の保護者会に来たところ、RSSCのパンフレットを見つけて。

● RSSCの魅力

- カルチャーセンターではないという点。「シニアが社会参

加の担い手としてセカンドステージに踏み出すための新しいキャンパスの創造」というコンセプトに共感する。

- 受け身の授業だけでなく、ワークショップで意見交換できる点。
- ゼミがあるのが一番の魅力。
- 前向きな人が多く、刺激される。ここに来て新しい友だちができた。
- 定年で一区切り、後は悠々自適という知らず知らずに染みついてきた考え方が、定年は通過点だというように変わった。
- 修了後の社会参加のためのサポートセンターがあり、外への働きかけのプラットフォーム的役割を担っている点。
- 他大学にも通ったが、そこは知識の切り売りで質問にも答えてくれない。生徒の目的や意識もバラバラ。RSSCに来る人は濃淡はあってもみな目的は同じ。
- 立教大学が商売抜きに教育的配慮として運営している。
- 一生の恩師に会えた。
- 若い学生と一緒にだし、女性も多いので、身だしなみに気を遣うようになる。
- 学部生と一緒に授業を受けられる全学共通カリキュラム。
- 先生のほか、RSSCに通っている人たちからの別の学びがある。
- 縦でも横でもない斜めの関係が持てる。

